



Title	D.H.ロレンスの『虹』に見る「知識」と「技術」と「願望」の主題 (その2)
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1978, 18, p.45-58
Issue Date	1978
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/9674">http://hdl.handle.net/10069/9674</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-28T18:04:50Z

# D.H.ロレンスの『虹』に見る「知識」 と「技術」と「願望」の主題（その2）

中 村 嘉 男

## The Theme of Knowledge, Art, and Hope in *The Rainbow* by D.H. Lawrence(Part2)

YOSHIO NAKAMURA

### III

「知識」や「技術」を用いて現実に美を生かすことの至難さは、ウィルとアナの長女アーシュラの時代になると、ますます痛切に感じられるようになる。なぜなら、その時代とは、急増する断片的な知識や機械的な技術によって、人間がかつてないほど厳しく「縛りあげられていく」<sup>1)</sup>時代だったからである。ロレンスは、「虹」をかけることが最も困難になったこの時代に生きる主人公アーシュラに、同じ時代に生きる人間として、最も深くかかわらざるをえなかった。彼は彼女に、父親の深く暗い感性と、母親の屹然として貴族的な知的性格を与えることによって、「虹」を成就できる可能性が最も弱まった時代的狀況に対処したのである。

『虹』のほとんど半分近くを占めるアーシュラ・セクションは、しかしながら、批評家たちからあまり積極的な評価を受けていない。たとえばトム・ブラングイン一世に対しては正反対ではあってもそれぞれ意味深い評価をしていたリーヴィスとストゥルは、アーシュラ・セクションに対しては共にあまり印象に残る評価をしていないのである。彼らは二人共、そのセクションを『恋する女たち』への過渡的な状態を描いたものとする見方に捕われ、<sup>2)</sup>統一的なテーマを見いだせないでいるのだ。だが、そのセクションにも「希望」と「知識」、夢と現実といった神話的なテーマがはっきりと流れていることに気付けば、それが小説全体の調和を乱しているという批判はまとはずれであることがわかるだろう。新しく登場する主人公アーシュラは、妥協することを知らない激しい内的自我をもち、とほうもない「願望」を抱いて現実の中へ入っていく。そこで手痛い目に会いながら得た「知識」で、彼女は、内なる「願望」をさらに強靱な生き生きとしたものにしつつ、「外」へ力強く立ち向かっていくのである。その姿勢は、『虹』

の第一章から繰り返し提示されてきた「希望」と「知識」のテーマとその問題点を一層尖鋭化しており、アーシュラの試行錯誤は決して「過渡的」なのではなく、「希望」や「知識」の問題と共に「根源的」なものなのだ。それは、農場から教会の塔をながめ「知識」にあこがれた彼女の曾祖母の生き方に劣らず古い、人間の変ることのない本性的な姿をあらわしているのである。

※

少女時代のアーシュラの特徴は、彼女の父親のそれと同じように、「二重生活」を送っているとみられる。すなわち彼女は、「なにか彼女を認めようとはしない、強い力の感じられる」週日には「たえず不安の苦痛に悩んでいた」が、日曜日になると、「大きな自由感、歓びが彼女を包んで、湧き起るように思え」、「誰の反対を受けることもなく、自由自在に夢の中をさまよい歩」きながら、「究極的実在」へ「一辺倒」になるのである<sup>3)</sup>。

彼女の夢は、主に旧約聖書の物語を中心に展開されていくのだが、それは特にエルンスト・ブロッホの言う「キリスト教の中の無神論」的な部分にかかわっている。すなわち彼女は、神が人となって「上からの救済」を下されるのを待つのでなく、「何ものかを求める不平」<sup>4)</sup>を抱いてみづから「神のごとくならん」と「希望」するのである。彼女は、「創世記」の中の「神の子等、人の女子の美しきを見て、その好む所のものを取りて、妻となせり」<sup>5)</sup>を読んで「胸をときめかせ」、「その頃自分がいたら、自分もまた神の子等によって、美しと見られたのではあるまいか？そしてその一人に選ばれて、妻とされたのではあるまいか？」と、「自分でもびっくりするような夢」<sup>6)</sup>を見るのだ。

彼女のすぐれた点は、「この秘かな希望、あこがれを、どこまでも」抱いたまま週日の世界に出ていこうとするところにある。この点で彼女は、現実がほとんど目に入らなかった父親のウィルや、現実を無視して美の世界に「没入」するようになる妹のグドルーンと大きく異なっていた。もちろん彼女は、週日の世界から手厳しい報復を受けることになる。そして成長するにつれて、「問題は、週日の世界だけ」であり、「週日的人間にならなければならない」と思うようになる。しかしアーシュラの場合、それは決して彼女の母親のような、現実の世界への無批判な没入を意味するものではなかった。むしろあまりにも幻想の世界にひきこまれやすく、「霊の世界と週日の世界との、激しい混乱に襲われ」<sup>7)</sup>ることが実にしばしばなので、自分の多感さに振り回されるのがつくづく嫌になった彼女が、夢みがちな我が身をなんとか現実につなぎとめておこうとしただけなのである。

アーシュラがアントン・スクレベンスキーに出会ったのは、彼女がこのように青春期特有の「あこがれ」と「不信」の交錯する「暗い混乱の日々」を送っていた16才の時であった。「彼女はたちまち夢の対象として彼を捕えてしま」うのである。「ひとり超然ととまっていた、言訳

や説明は、決してしな」い彼の貴族的な態度（実際彼はポーランド亡命貴族の一人息子であった）に、「この人こそ、あの人間の娘を美しと見た『神の子』の一人だ」とアーシュラは思う。こうして彼女はとほうもない夢を抱いて現実の混乱の中へ勇敢に入っていくのだ。<sup>8)</sup>

アーシュラにとってスクレベンスキーが大きな驚異のまともになったのは無理からぬ面がある。すでに両親を亡くしていた彼は、アーシュラの「あなたの本当のお家は今はどこですか？」という問いに、「軍隊」だと答え、さらに、自分が生れ育った牧師館よりは「外の世界の方がずっと自分の家のような気が<sup>9)</sup>」すると説明して、彼女の彼に対する驚異の念をますます煽るのである。一体なぜ彼においては「内」と「外」、「個」と「社会」がかくも見事に折り合えるのだろうか。「夢」に耽って「外」で失敗ばかりしていたアーシュラには、どこにいてもごく自然な落着いた態度で行動できるスクレベンスキーは、まさに汲めども尽きぬ魅力の源泉のように思われたのであった。

「外の世界」でもとりわけ規律によって個人の自由が制限される「軍隊」こそ自分の「本当の家」だと言うスクレベンスキーは、もちろん、作者が自分の思想を平明な形で伝えるために典型化した人物である。ある意味では彼は、ロレンスが『トマス・ハーディ研究』において述べた「本当の男性」と言われうる人物なのかもしれない。ロレンスによれば、「本当の男性は、自分のもっと女性的な部分である肉体を全く顧慮せず、ただ自分自身をある観念のために用いられる道具としてのみ考えている<sup>10)</sup>」のである。スクレベンスキーも国家の目標を自分の目標として軍隊に仕えており、自分が国家の道具として使われることに何の矛盾も感じていない。我に固執することなく自分のすべてを「外」に投げだし、「一切を宿命に委ねて、安心している（彼の）姿は、見方によれば、一種の物ぐさ、懶惰とも思えるほどであった<sup>11)</sup>」のだ。

スクレベンスキーのこのような態度は、個人と共同体の利害の幸福な一致が可能となる時代には、たしかに男らしく貴族的なものであるに違いない。だが現代において「外」に対立する「内」なる世界をもたないということは、ほとんど致命的な欠陥にならずにはおれないのである。なぜなら現代とは、国家がその巨大な管理機構によって個人の自由をますます私的な狭い範囲に限定するようになった時代であり、反面、物質的な豊かさが与えてくれる自由時間の増加のために個人の夢は狭く限定されればされるほどその中でふくれ上らずをえず、それと国家の利益の対立はかつてなく厳しい対立を示すようになっていたからである。このような時代に自分というものをもたないスクレベンスキーは、男らしく貴族的であるというよりむしろ全く逆の感じを与える。彼はむしろ、知識や技術を授けられた人間がやがてウィルの言う「怪物的な」文明を作りあげていく過程で、今度はその「怪物」自身に支配されて内的世界を失っていた現代人の一典型のように思われてくるのである。

スクレベンスキーをアーシュラの家に最初に連れて来たのは彼女の叔父トム・ブラングイン二世であったが、この二人の男性には本質的に共通するところがあった。それは簡単に言えば

確固とした内的世界の欠除ということになるかもしれない。トム二世は父親と異なり生れつき頭がよく、知識や技術を身につけ経済的な安定を得て、自分のしたいことをしながら世界各地を転々としていた。が、「大地の根のあいだ」から離れて動き回っている彼の欲望追求には何か本質的なものが欠けていたのである。彼は、「一人の時には、一向決断のない男」だが、他の人と一緒にいればその人を立てることによって自分の独立を維持できるような男だったのであり、内から自づと湧いてくる生命力をもたないため他者とか外界を通してやっと自分が規定できるような弱い性格の持主だったのだ。<sup>12)</sup> この自分の内部に「大地の根のあいだ」から生れた「願望」や「欲求」をもたないという点で、彼はスクレベンスキーに根本的に似ていたのである。

トムに劣らずスクレベンスキーも自分の欲望追求には熱心である。だが、彼もまた自分の「本当の家」をもたず、大地に根を下ろすことができない外界の放浪者であり、その欲望は真に自分の内部から湧き出たというより外界から承認され与えられたものといった感じが強い。彼は、魅力的な女性と交際し、ポロとか狩りといったスポーツや趣味に熱中し、社交生活を身軽にこなし、軍人としての仕事に没頭しさえすれば、それで人生は立派に生きられると思っている。まことにその通りかもしれない。これ以上一体何を「望む」ことがあろうか。ほとんどの人が、せいぜいこれぐらいかこれ以下の生活しか送っていないのが現状ではないだろうか。この外面的に申し分のない生活は、内面的に申し分のない生活と全く同義ではないのか。

16才のアーシュラがまず最初直面しなければならなかった難問は、この外面的に豊かな生活の内実を知ることである。彼女にとって、スクレベンスキーとの夢に浮かされたような交際は、最初のうちは、まさに外面的にも内面的にも申し分がないように思われたのであった。彼女は彼を「ただ己れの欲望の中でのみ」存在させながら、「恋愛遊び」に夢中になって現実に「官能的な喜び」を追い求めたのである。感覚に感溺しては「痛いばかりの生のはかなさ」を覚えたり、一人で手前勝手に陶酔しては彼に「ただ苦痛と混乱した怒り」を感じさせたりしていたが、大むね彼女は、「己れの欲望」がそのまま現実の法則となる日曜日の世界を生きていたのであった。<sup>13)</sup> だが、どういうわけか、彼女はこのような楽しいだけの生活に、やがてある行詰りを感じるようになるのである。

彼女は、彼女の二番目の叔父でトム二世の弟にあたるフレッドがマーシュ農場で結婚式を挙げたとき、野外ダンスの官能的な陶酔に浸っている人々の中で、なぜか一人だけその陶酔からさめる。彼女を感覚的な混沌への没入から救い上げたのは、折から昇ってきた月である。彼女はこうこうと輝く月に向って自らをさし出し、ただ没入しているだけではとうてい得られないある「完成」を「欲する」のである。清浄な月の光に体にまつわりついている感覚的な汚れをすっかり洗い流された彼女は、全身をその光に浸しながら孤高の境地に歩み入り、「もっともっと深い月光の交歓」を渴望するのだ。「あの月のもつ涼しさ、明るさ、そして完全な自由さ！完全に自分自身であり、完全にしたいことのできる、あの冷たい自由さがほしい！」と彼女は

思うのである。<sup>14)</sup>

この渴望が、ただ外面的にいろいろと豊かなだけの生活によっていやされるものでないことは、言うまでもない。スクレベンスキーがアーシュラのこの渴望に自分で答えようとするなら、彼もまた月の光に自ら浴し、彼女と対等の孤高の立場に立たねばならないだろう。にもかかわらず彼は、感覚的ににごった気持を抱いたまま、「鈍い惰性のように」彼女につきまとうだけなのである。ダンスの官能的な混乱にまきこまれたあとの、岸に打ち捨てられた投荷のような気持をどうすることもできない彼は、その空ろな心がアーシュラから離れまいとする鈍重な意志に支配されても、なすすべがないのだ。外面的な充足が終ったとき、彼の心はまた内面の死にも直面しなければならなかったのである。

アーシュラは、このようなスクレベンスキーに「異様な怒り、なにもかも一思いに引裂いてしまいたいような怒り」にかられ、「両の拳が、まるで殺人剣のように、破邪の衝動にふるえ」るのであった。外面的な充実を失って内面的にも空ろになったスクレベンスキーにとって、このようなアーシュラの苛烈きわまりない自我は、冷たい「塩の柱」、<sup>15)</sup>「一片の月光のよう」な「鋼鉄の刃」にはかならなかった。だが、空ろな内部を盲目的な意志に占有されてしまった彼は、執拗に彼女につきまとい、接吻を求める。それが自殺に等しい行為だとわかっていても、彼の盲目的な意志は、その絶望的な動きを引きとどめてくれる根底からの活力を全然もたなかったのだ。

She took him in the kiss, hard her kiss seized upon him, hard and fierce and burning corrosive as the moonlight. She seemed to be destroying him. He was reeling, summoning all his strength to keep his upon her, to keep himself in the kiss.

But hard and fierce she had fastened upon him, cold as the moon and burning as a fierce salt. Till gradually his warm, soft iron yielded, yielded, and she was there fierce corrosive, seething with his destruction, seething like some cruel, corrosive salt around the last substance of his being, destroying him, ……<sup>15)</sup>

断るまでもなく、この種の一方向的に破壊的な勝利によってアーシュラの願望が本当に実現されることはありえない。16才の少女は、このすさまじい破壊衝動がもたらした結果にただ呆然とするだけで、外面的・日常的な自我が滅ぼし尽されたあと、自分がどこへ向ったらよいのか全くわからなくなってしまうのである。それで、「昼間の意識ともいうべきものが、ようやく戻って来た」とき、彼女は「底知れぬ恐怖に襲われ」、「あのさっきの燃えるような、腐蝕剤のような自分、あれは断じて自分ではない」と思いこもうとするのだ。折角彼女は、日常的な自我を破壊し去って本当の自分を見出しかけたのに、「ふたたび善良な、やさしい」平凡な自分に戻って、もはや「形骸」だけになったスクレベンスキーをやさしく愛撫しようとするのを

である。日常生活の「生温い平凡，陳腐の世界」にかえて、「単にやさしい，善良な一人の少女」たらんとしたのである。<sup>16)</sup>

まだ16才のアーシュラには，月の光から受けた苛烈な印象を啓示として受けとめるだけの知識と経験が不足していた。なるほど彼女には，「思い切って反逆してみたい，阿修羅のように戦ってみたいという気持も，大いにあった」が，「全世界を相手にして」闘うのに武器といえ，まるでプロメテイスの火を受けついでばかりの原始人のように，ただ彼女自身の「小さな両手だけ」<sup>17)</sup>という有様だったのだ。外面的に豊かになってきただけにますますあなどり難い敵になった世界に対する知識もなければ，それに対抗してゆく技術も彼女はまだ所有していなかったのである。それゆえ彼女は，自分自身の手で形骸にしたはずのスクレベンスキーにまだ自分が縛りつけられていると思ひこんだり，そう思いながら，国家の要請で軍人としての義務を果たすため彼が南阿に行こうとするのをはっきり批判して止めることもできなかった。彼が戦争に行くことについて「どう考えていいかわからず」，ただ当惑するだけで，「一種なんともいえずぬえぬえしさ，深い灰のような失望」<sup>18)</sup>を感じながら，その気持を十分に意識化し対象化して克服することができなかったのだ。彼女が個人の世界を蹂躪する外部の「巨大な力」に対抗するためには，彼女自身がその外部に入って，その力に踏みにじられながら幾つもの経験を重ねてゆくほかないであろう。そのような経験を通して初めて彼女は，敵の力を「知」り，それに対抗できる「技」も身につけることができるに違いない。

### ※

アーシュラは，自分でもその正体をはっきりつかめない空しい気持を抱いたままスクレベンスキーと別れて6年という長い年月の間，彼とは一度も会うことがなかった。彼女はこの長く不毛な年月の間に，たえず新しく生れ変わる「希望」を抱いて現実と深くかかわりながら，そこで痛い目に会うことによって得た「知識」によってますます本当の自分自身へ近づいていくのである。そして最後に，南阿からあらたな存在感を漂わせて帰ってきたスクレベンスキーと再会し，彼との関係を今度は徹底して深めながら，彼女は6年間で得た知識と経験を一助としてようやく二人の関係の真の意味を理解できるようになるのだ。

スクレベンスキーに再会するまでの6年間でアーシュラが経験したことは，大きく三つに分けられる。高校の担任教師インガー嬢と親しくなったこと，近くの炭坑町の小学校で代用教員として働いたこと，ノティンガム大学へ通ったこと，の三つである。まず，スクレベンスキーと全く気まずい別れ方をして幾分空ろになったアーシュラの心に最初に忍びこんできたのは，彼女の高校のクラス担任のインガー嬢である。彼女は「科学的教育」を身につけた，28才の「いわゆる近代型女性の一人」で，かなりの美人であった。アーシュラは自分でも知らないうちにこの女性と同性愛的な関係に落ち込んでいく。彼女との接触は，最初からアーシュラに「底知

れない暗黒」, 「暗黒な空虚<sup>19)</sup>」を感じさせ、実際にその官能的な側面はすぐに行詰まるのだが、それを否定的な媒体にして彼女が学んだものもまた大きかった。アーシュラがインガー嬢との付き合いから学んだものは、簡単に言えば、知識の死物化がどれほど人を墮落させるかということになるかもしれない。

インガー嬢は「科学的教育」を身につけた「近代型の女性」らしく、「怜利で、機敏で、几帳面で、命令的で、することなすこと抜かりはなかった」が、「実はその強さ、自立心そのものが、そのまま隠れた彼女の悲哀のあらわれ<sup>20)</sup>」であるような女性だった。彼女の「怜利」な認識はたしかにある一つの現状を鋭く突いて、その限りでは明快で正確な分析をおこなっていると言える。たとえば、「観念」に捕われた現代の男性の愛を批判して、「生きた人間のところへ来て、愛する男なんて、誰もありゃしない。みんな観念のところへ行って、『ああ、あなたは私の観念だ』って、そういうだけ、そして結局自分自身をしっかり抱いているだけなのね<sup>21)</sup>」と言うインガー嬢の言葉は、まさに、現代的な愛の一面に対するロレンス自身の考えを述べたものと見てもさしつかえないであろう。しかし彼女の場合、この種の批判的な知識はいくら適確でも、変動きわまりない現実に対してはそれ自身すぐに「観念」そのものへ墮落してしまうのだという認識が欠けている。正確な現状分析も移ろいゆく現実に対してはたちまち「観念」にすぎなくなってしまうという突き離れた捕え方が彼女にはないのである。必然的に彼女は、生きた現実に入って行っても、固定したニヒリズムを抱いているためそれを死物化してしまわざるを得ない。彼女の現実の男性との関係は、彼女の「観念」によって永久に冷えたままであり続けるほかないのだ。

知識を、それがいかに正確に現状を分析したものであっても、このように固定化して用いるところが、インガー嬢のトム二世と根本的に類似している点である。彼女はアーシュラによって今はウィギストンで炭坑を営んでいるトムに見合いの相手として引き合わされたのであった。彼らは初対面でたちまち互いにある腐敗した親近感を抱くのである。

アーシュラは初めて訪れる炭坑町の醜さに圧倒され、トム叔父になぜ町の人々は「悲しそう」な表情をしているのかとたずねる。この真剣な問いに対してトムは、人々は「そんなことは、もう当たり前だと諦めている」ので、彼らが「悲しそう」だとは自分は思わないとはぐらかすような答え方をする。そして、「諦め」ないで「なぜ改めようとしなないんです？」と「いきり立って抗弁」するアーシュラに、トムは、「なにここの連中はね、炭坑や町を自分たちに合うように改めるよりね、むしろ自分たちの方を、炭坑や町に合うように変えなくちゃならんと思っ込んでいんのさ。第一その方が、ずっとやさしい」と説明する。彼は、「相当肺病で死ぬものが出る」炭坑労働の、「聞いただけでもゾッとする」ような現状をちゃんと知っているが、その現状に労働者を放置しておくだけなのである<sup>22)</sup>。そして、現状に対するその正確な知識を現状を少しでも改める方向へ用いながら、知識を現実の「大地」にかかわらせることによ



て、己れの生もまた「大地の根のあいだ」に据え付けようとする努力は一切しないのだ。

インガー嬢は、知識を死物化することによって根もとから墮落したトムに、本質的に通い合うものを感じていた。彼女は、「問題は、要するに貸銀さ、ね。イギリスでも最も道徳的だといわれるある公爵などは、こういった炭坑から、一年二十万ポンドは儲けている。こうした人物が、道徳目的の支柱なんだからな」と嘆かわしそうに話すトムと共に「現状を慨嘆する」が、実は、そのような慨嘆そのものから「冷酷な満足感を味わっているようにさえ見える」<sup>23)</sup>のである。なぜなら、彼らは二人共、正確な現状認識を死んだ知識とすることによって、自分たちの生を腐臭を発するよどみの中に放置し、そこから抜け出ようとする努力をなんらすることなく、日々の生活に「望む」ことを諦めて停滞した満足を感じていたからである。彼らは、「一応現状のひどさを、皮肉げに罵りながらも、なおそれから縁を切ることのできぬ連中の仲間にとどまってい」<sup>24)</sup>たのだ。

断るまでもなく、二人のこのような生活態度に対する否定を徹底して持続させることによつてのみ、アーシュラの真の成長は可能になるであろう。これはしかし、決してなまやさしいことではない。特に、高度に発達した意識をもつようになった現代人は、自分をとりまく現実や自分自身に対して相当正確な知識をもつことができるようになったが、この種の知識は、トムとインガー嬢のそれのように、しばしば現実の中で軟弱なニヒリズムに墮して、真に生を解放する力になることがなかなかないのである。いやむしろ、それは「観念」となって現実を固定させ、生の自由な動きの妨げになる場合の方が圧倒的に多いのだ。

トムとインガー嬢の軟弱な精神的姿勢は、いかにも容易に批判できそうな形で提示されている。だが、本当にそれを批判することによって超克できる人は、一体幾人いるであろうか。大部分の人は、自分が何に不満なのか、何が自分を本当に満足させてくれるのか、それさえわからずに死んでいった炭坑夫と本質的にそれほど差のない次元で生活しているのではないだろうか。たとえ真実に目覚めることはあっても、その知識を現実に生かせないまま結局は無知蒙昧な人々と同じ次元で生活を送っているのではあるまいか。

アーシュラはしかしながら、一旦真実に目覚めたらあくまでそれを現実に生かそうとする努力を怠らなかつた。彼女は、トム叔父やインガー嬢に対する否定を、すなわち知識の死物化に対する否定を、高校を卒業して社会人になり「男の世界」の仲間入りをしたあとでも持続しようとする努力したのである。彼女は高校卒業後、自分の家の近くの薄汚い炭坑町イルクストンで代用教員として実際に仕事の世界に入っていった。が、そこでの厳しい経験は、知識を形骸化する学校という現実に妥協することではなく対立することを彼女に教えたのだ。わずか2年間の教師生活ではあったが、そのおかげで、「彼女の本当の個性的魂はむしろグッと緊って」きた。学校はたしかに「不断の牢獄」であったが、「同時にそれは、混沌にも似た彼女の野育ちの魂が、それによって、むしろ厳しい独立性を獲得した牢獄でもあった」のである。ながえにつな

がれた子馬のような状態に「いつまでも屈している気」はなかったが、「それにはまず相手を知らねばならぬ。ぶっ壊すために、まずしばらく仕えるのだ」という気持で、彼女は教師生活を続けたのであった。<sup>26)</sup>

本当の自分自身に至ろうとすると大きな妨げとなる「相手」を「ぶっ壊すために」の知識は、しかしながら、アーシュラがイルクストンの小学校にいる間は、まだ十分に獲得されたとは言いがたかった。そこで彼女が得た知識は、いまだあいまいで、敵の正体をしっかりつかんでいるとはとても思われなかったのだ。彼女は、「サンザシの花が露に濡れ、バラ色の小さな麥粒は、まるで露の球のように輝いている」朝、教壇に立っても「とうてい授業という活動に没入してしまう気にな」れず、「五十人の子供の顔」が「まるで仄暗い牧草の中に交った、大きなヒナギクのように見える」ときに、どうして「無理にでも算術の勉強を叩きこまなければならない」のだらうと思う。だが、「そのくせもう一つの良心が、たえず彼女の胸を噛んで、まだ仕事はちゃんとできてないじゃないか、とささやくの」である。結局彼女は、この二律背反的な関係の解消、すなわち、「本当に自分を失わないで……存分に人生を楽しむ、幸福な自分を保ちながら、しかも同時に、級の成績を上げるよい教師になる」ことが納得のゆく形でついに実現できなかった。彼女は学校で教える知識を真に子供たちの生に生きた形でかかわらせることに結局成功しなかったのだ。このことに満足できる程度まで成功しなければ、自分は少なくとも小学校の教師である昼の間は、「仕事の世界」に埋没し、「未来を見る力を失った」存在となるほかないように彼女には思われたのである。<sup>27)</sup>

アーシュラがこのような否定的な状態に耐えていたのには、一つの大きな理由があった。それは、彼女がもうすぐ代用教員をやめて大学にいけるとい希望をもっていたことである。この近い未来に現実化されることがはっきりしている希望からまた幾つかのはななくも美しい希望が生れ、それらが彼女の現実を見る目をバラ色に曇らせたことは否めない。彼女は、「灰緑色の小さな蕾を幾千となく無数につけ」た梨の木を見ながら、「やがて迸り出る時を待つてひしめき並んでいる無数の生命」を思い、深い啓示にうたれ、自分の未来もまもなく花と開くはずだと期待に胸をふるわせたりしていたのであった。<sup>28)</sup>

だが、アーシュラが大きな期待を寄せて入学した大学は、当然のことながら、それに答えることのできる知識を彼女に授けることはできなかった。2年たたないうちに彼女は、大学が「信仰のための修道院でもなければ、純粋学問のための聖地でもない。ただ将来金儲けのための装備を一段と身につける、ちょっとした徒弟養成所にすぎぬ。学校そのものが、工場のためのだらけ切った、小さな実験室」なのだと思うようになる。そこで授けられる「知識」は、いかにも「宗教的巧徳のためにあるような顔をしているが、真実は、その知識という宗教的巧徳そのものが、すっかり物質的成功という神への奉仕者になっている」と彼女は考えるようになるのである。<sup>29)</sup>

大学をこのように「真の生産性などというものは微塵もな」い「インチキ作業場」として捕えるアーシュラには、「汽車が走り、工場が機械製品をつくり出し、植物や動物が、科学と知識の光によって活動している……光明圏」の空しさがよくわかってくるようになる。彼女は、「闇の中から」「キャンプの焚火や眠っている人たちの空しさを、じっと見つめる」「野獣」になって、「『われらの光、われらの秩序の彼方は、すべて無』と称して……意識の灯明ばかりひたすら見つめている人々の……奇妙な愚かしさ、空しさ」を痛感するのである。そして、「光への空しい過信は清算し終り」、暗黒の中に入って、「ハイエナや狼の眼の閃き……こそやがで潜るべき門に輝く天使の剣の閃きであること、そしてまた暗黒の中の天使は、あたかも牙の閃きにも似て、見るも怖ろしい威容を示しながら、しかもなんとしても否定しえない存在であること」を悟るようになるのだ。<sup>30)</sup>

アーシュラが今では南阿で大尉になったスクレベンスキーと6年ぶりで再会したのは、彼女がこうして大学を否定的媒体にして「暗黒」の世界からの知識を徐々に学び始めていた頃であった。スクレベンスキーは、帰国後はさらにインドへ赴任する身であったが、しばらく休暇をもらってイギリスに滞在したのである。そのときの彼は、軍人でも小市民でもなくなり、平凡陳腐な光にみちた昼間の世界からいくらかでも後退できる恵まれた立場にあった。アーシュラもまた大学生という有利な身分であり、二人はやがて社会的地位とか世間態など一切気にしないで、思いきり深く「暗黒」の世界へ入り込んで行くようになるのだ。

※

軍人とか小市民といった社会的な仮面を取られてしまえば無になってしまうはずのスクレベンスキーであったが、彼はアフリカにいる間に、その「たえず恐怖が漂っている」ような、「血の臭いのする」暗黒を知るようになっていた。そしてアーシュラに、「黙々と流れる黒い河水」のそばを歩きながら、「黒人の……まるで快い湯にでもつかったような、放恣、溫柔な情熱<sup>31)</sup>」について話す。アーシュラも、スクレベンスキーが南阿に行っていた6年の間に、この官能的な「情熱の暗黒」に十分答えられるほど成長していた。いやむしろ彼女は、スクレベンスキー以上に大胆で勇敢になっており、まるで「夜すさまじい声をあげて叫ぶ豹のように自由」に、「すべてが放蕩のような快樂」の中へ彼と共に入って行くのであった。こうして二人は、「操り人形」のように空しい「普通の人間世界というものを頭から無視してかか」り、「絶対の幸福に浸り切」るのである。「まるで天使のような幸福に酔い痴れ」ながら、「もはや一切の制約を越えた、いわば絶対の男女<sup>32)</sup>」になり切るのだ。

だがまもなくアーシュラの心に、このような官能的な没入から逃れたいという気持ちが起ってくる。二人はそこでピカデリーのホテルからパリに行き、さらにパリからロンドンへ帰る途中ルアンに立寄る。このルアンでスクレベンスキーは初めて「冷たい死の感情」を味わうことに

なる。「無常も知らず、否定の声も聞かず、泰然と眠っている」ルアンの「巨大な石造の伽藍」を見ながら、アーシュラの「魂」が「単独で走り出した」のだ。スクレベンスキーは、彼女が自分「以外のものを追い求めて」「離れようとしている」事実、「不安に戦きはじめ」、「熱病のようにおびえ」るのであった。<sup>33)</sup>なぜなら彼は、アーシュラと再会してからずっと彼女と共に「暗黒」の体験を重ねながら、彼女のようにそこから「全世界を相手にしても負けない強さ」を獲得することがついにできなかったからである。アーシュラの方はそれに対して、「夜の闇と誇りの中で知った……孤独の力強さ」から己れの「永遠の自我」を悟り、それによって自分に対する完全なる「自信」、「世間は強くない、——強いのはわたしだ。……至上至高の存在は、わたしただ一人なのだ」という揺ぎない自分への確信をもつようになっていたのだ。

この自分自身に対する絶対的な自信こそ、6年前のアーシュラがどうしても自分のものにすることができなかった知識である。だがいまや彼女は深い自己への信頼という知識を得て、周囲の様々な事物に戦いを挑むことができるようになる。彼女から離れたら「生ける屍」も同然の男になってしまうスクレベンスキーも、彼女が挑戦しなければならぬこれらの「事物」の一つにはほかならない。彼は暗黒の世界から生きた知識を何らもち帰ることができず、ただ「結婚」という制度にすがってアーシュラを自分のもとへ引きとどめようとするような男であり、結婚をこのように形骸化することによって、最初アーシュラと共に否定したはずの、「操り人形」の動めく「インチキお芝居」に再び加わろうとさえする意気地無しなのだ。

大学で教えられる死んだ知識を否定して大胆に「暗黒」の世界へ踏み込み、そこで生きた知識を獲得して戻って来たアーシュラにとっては、もはや昼の世界でおこなわれているこの「インチキお芝居」に参加することはとうてい不可能である。昼の世界では様々な虚偽が幅を利かせており、「まるで世界の重荷をただ一人で背負ったかのように、いかにも勇ましげに、……走って行」くあの「汽車」ですら、その虚偽に加担しているのである。いや、「汽車」こそ、「知恵の木の実」を食べさせられ、「プロメトイアの火」を授けられた人間が、今日まで営々として発展させてきた高度産業機械文明を、典型的に象徴しているものの一つかもしれない。その「汽車」は、「ただ盲目的に、しかもひた走りに急い」でいるが、「いったいどこへ行くのだろう？どこへ行くのでもない。ただ走っているだけなの」であった。<sup>35)</sup>

アーシュラには、知識と技術が「盲目的に」向っているこの方向にただ黙って従う気持はさらさらなかった。かといって彼女は、スクレベンスキーがただ一つだけそれによって彼女を満足させてくれた官能的陶酔への没入しかない生活に我慢できるはずもなかった。いわば彼女は、知識と技術が現代文明という形をとって進んでいる方向に従うこともできなければ、感覚的生活に浸り切っている「エデンの園」の住人となることもできなかったのだ。彼女は何としても「エデンの園」から出てその外に自分の楽園を見出さなければならない。だが、それは一体いかなる方向にあるのだろう。

アーシュラは、スクレベンスキーとの「肉体的接触のたびに」、<sup>36)</sup>「かつて一度も彼からは得られなかったあるものに対する欲情が、いよいよ強く」なり、それがどうしても彼から得られないだけに、二人の愛が「いよいよ絶望的なものになって行く」のを感じないではおれなかった。「原始根元の裸の男」としての彼には満足できるのだが、彼女は何としても、「原始根元」の状態から一歩か二歩でも充実した形をとって出たかったのだ。<sup>36)</sup>だが、スクレベンスキーはこのアーシュラの渴望について答えることができず、それが二人の関係の、月光の中における二度目の破綻の決定的な原因となったのである。

結婚を間近に控えて二人は、スクレベンスキーの大伯母の主催するパーティに出席するため一週間ほどリンカシア海岸のバンガローに滞在した。アーシュラは昼の間はテニスやゴルフ、水泳とかボート漕ぎなどで気を紛らわせたが、「夜になると、妙になにか未知なものへの憧憬」が「胸一ぱいに湧いて来」て、海の「燃えるような輝き」を見ながら、「はげしい生の充足への衝動に悩まされ、狂おしいばかりに焦立つの」であった。そして、そのようなとき「必ずそこへ現われるのが」あのスクレベンスキーでしかないとすれば、またもやアーシュラの心にさまざまい破壊衝動が湧き上がってくるのはまことにどうしようもないことかもしれない。彼女は、「真昼のような月光の中で……急におそろしい破壊力でも授かったかのように、グッといきなり彼を掴んだかと思うと……激しく彼の唇を求め」る。そして、「一面に月光の照らす傾斜」で二人は、「忘我に至る烈しい闘い」を始めるのである。<sup>37)</sup>

だが、この闘いの結末はもうはっきりしている。しばらくして「死人のように力盡きた」スクレベンスキーは、アーシュラが「怖ろしい塑像」の姿をして「冷たい金属のように月光の中に横たわ」りキラキラ光る涙を「闇の中へポトリと」落とすのを目撃して、「このまま逃げだしてしま」いたい気持ちに駆られるのである。そして実際に彼はそのまま逃げだして、アーシュラの怖ろしい姿が突きつけていた難問に一度も直面することなく、あの空しい昼間の世界へ戻ってしまうのであった。「暗黒であり、挑戦であり、恐怖である」彼女をできるだけ忘れるため、彼は、「ひたすら当面目のことで、気を紛ら」わそうとしたのである。そうすることによって彼は、アーシュラばかりでなく「彼自身の魂」から逃れ、それを「暗黒」の世界に放置したまま、ついにはその存在すら忘れてしまうようになるのだ。<sup>38)</sup>

挑戦としての暗黒からただ逃げ出すことしか知らないスクレベンスキーとは異なり、アーシュラは、妊娠したことを知って一時現実との妥協を考えたこともあったが、結局、本来の自分に忠実に生きることによって暗黒を乗り越えていこうと決意するのである。妊娠というあまりにも重い現実には耐えながら、彼女がこのような勇気のいる決意に最終的に到達できたのは、十月のある午後、雨のふる牧場で経験したことのおかげであった。彼女はこの日、「なにか狂気じみた気持ち」に駆られて雨の牧場まで無謀な遠出をしてしまう。だがここで「黒々と、のしかかってくるような」馬の一团に脅かされた彼女は、「それこそ狂わんばかりに必死になって」

逃れようとする。樫の木によじ登って生垣の反対側にドサリと身を投げることでかろうじて逃れることに成功したアーシュラは、しかし、「すっかり疲れ切って、……まるで流れの底に、意識もなしに横たわっている石のよう」な気持になるのである。<sup>39)</sup>

妊娠によって自分は相変わらずスクレベンスキーに縛りつけられているんだと思い込んでいたアーシュラの苦しみを、「虚妄の苦痛」として遊離してくれたのは、この「流れの底に沈んだ石」の体験にほかならない。彼女は、「冷たい、烈しい嘔吐感」を覚えながら、「その底をついた」深い嘔吐感によって、いわば「これこそ一番の底、これより深いところはない」自分の存在の核のようなものを探りあてたのだ。「たとえどんな嵐が……吹きすさぶうとも、もはや何物によっても傷つけられず、何物によっても犯されない」「河の石」になってしまえば、一体何がこの世で恐ろしかろう、何をびくびくして毎日を妥協しながら過すことがあろう。

こうしてアーシュラは、数週間熱に浮かされて過しながら、結局、「殻をはねのけて……真っ裸になって飛び出そうとしている」「ドングリの実」のように、「あくまでも自由、あくまでも赤裸」に、「新しい根を下ろし……新しい『永却』の知識を創造しよう」と決意できるようになるのだ。もはや「両親も、アントン（・スクレベンスキー）も、学校も、友達もすべて」殻のように脱ぎ去って、「新しい『日』の中に、自分の根が、しっかり土をつかむ日も、決して遠くない」と彼女は思うのである。<sup>40)</sup>このような「希望の調べ」が、リーヴィスの言うように、「それに先立つ部分を見捨てた、全く唐突で裏付けのない調べ」<sup>41)</sup>でないことは、すでに詳しく見た通りである。知識の様々な否定的様態を身をもって体験してきたアーシュラには、「新しい『永却』の知識」を自らのうちに創造することによって現実に「虹」をかけることのできる可能性が、誰よりも大きく存在しているのだ。彼女は、インガー嬢やトム叔父の知識の死物化を否定し、知識の二律背反的な関係をどうすることもできない教師生活に見切りをつけ、また知識を単なる物質的繁栄に仕えさせるだけの大学からも去っていった。そして最後に、充実した暗黒の世界を共に経験しながら、そこから生きた知識をもち帰ることができなかったスクレベンスキーからも離れ、一人自分だけの「新しい『永却』の知識」を創造しようと決意するのである。このような彼女は、知識を「観念」に墮落させることなく、それを二律背反的な形に分裂させて一方を単なる物質的繁栄に奉仕させることなく、「しっかり土」にそれを据え付けることによって、夜と昼との世界の間「虹」をかけることが、誰よりも見事にできるのではあるまいか。『虹』の最後でこのような「希望」をもつことは、決して「唐突で裏付けのない」ことではないように思われるのである。

## 注

- 1) 比較文学講座 7, 『西洋文学の諸相』, 東京大学出版会, p. 93.
- 2) F. R. リーヴィス. 『小説家 D. H. ロレンス』, 文理, p. 192.  
J. E. Stoll, *The Novels of D. H. Lawrence*, University of Missouri Press, p. 132.
- 3) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, Penguin Books, pp. 270-75.
- 4) エルンスト・ブロッホ, 『キリスト教の中の無神論(上)』, 法政大学出版局, p. 95.
- 5) 旧約聖書, 『創世記』, 6章の2.
- 6) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, p. 276.
- 7) *Ibid.*, p. 287.
- 8) *Ibid.*, p. 292.
- 9) *Ibid.*, p. 293.
- 10) D. H. Lawrence, PHOENIX II, Heinemann, p. 481.
- 11) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, p. 292.
- 12) *Ibid.*, p. 240.
- 13) *Ibid.*, p. 304.
- 14) *Ibid.*, p. 314.
- 15) *Ibid.*, p. 322.
- 16) *Ibid.*, pp. 322-23.
- 17) *Ibid.*, p. 327.
- 19) *Ibid.*, p. 341.
- 20) *Ibid.*, p. 336.
- 21) *Ibid.*, p. 343.
- 22) *Ibid.*, p. 348.
- 23) *Ibid.*, p. 349.
- 24) *Ibid.*, p. 350.
- 25) *Ibid.*, p. 348.
- 26) *Ibid.*, p. 407.
- 27) *Ibid.*, p. 410.
- 28) *Ibid.*, pp. 420-21.
- 29) *Ibid.*, p. 435.
- 30) *Ibid.*, pp. 437-38.
- 31) *Ibid.*, pp. 445-46.
- 32) *Ibid.*, p. 454.
- 33) *Ibid.*, pp. 456-57.
- 34) *Ibid.*, p. 452.
- 35) *Ibid.*, p. 464.
- 36) *Ibid.*, p. 463.
- 37) *Ibid.*, p. 480.
- 38) *Ibid.*, pp. 480-83.
- 39) *Ibid.*, p. 490.
- 40) *Ibid.*, p. 493.
- 41) F. R. リーヴィス, 『小説家 D. H. ロレンス』, p. 190.

(昭和52年9月28日受理)